

教育学会

“現場”からの報告で情報交換

小・中・高校の教職に就くOB・OGや、教職を志す学生ら約150人が一堂に会し、「専修大学教育学会」第53回大会が、11月23日に神田キャンパスで開催された。

錦織政晴都立府中高校副校長(昭55院文修)の総合司会で開会。初めに「東京都の教育改革」と題し、都立城東高校校長を05年に定年退職した米沢晃氏(昭44商)が記念講演。37年間の教職体験談を交えながら、東京都の教育施策について詳説した。

続いて「小学校」「国語科」「英語科」「地理歴史・公民・社会科」「商業・情報科」の5分科会に分かれ、教育現場の報告、生徒指導、授業の課題や工夫・改善方法、進路指導などについての討論、情報交換が行われた。

定期総会では、日高義博学長(教育学会会長)、出牛正芳理事長があいさつ。今年度の新会員に日高学長から記念品が贈呈された。



講演する米沢氏

森下ゼミOB会

30回祝賀会開く

森下健三ゼミの第30回OB会記念祝賀会が10月15日、帝国ホテルにて1期生から24期生までOB33人と森下名誉教授ご夫妻の計35人が出席して行われました＝写真。長年、森下会の事務局を担当されていた高橋隆先輩(5期生)が今夏亡くなられ、会は追悼の意を表し、黙祷から始まりました。ご夫妻を囲んで思い出を語り合い、ゼミでの激論やインター・インナー大会への出場の話など、「勉強で苦労はしたけれど、今思うと楽しかったなあ」というお話ばかりでした。



全国にOBが散らばった今、年に一度でもこの会を続けていければありがたいと、専修大学ならびに森下ゼミに感謝しています。(昭57経済・OB会事務局・檀原康伯)

秋の褒章

<12月7日現在判明分>

◇藍綬褒章

河上 茂氏(かわかみ・しげる=昭46法)
木原 奉文氏(きはら・ともふみ=昭51経営)

◇瑞宝双光章

宮本 進氏(みやもと・すすむ=昭28商経)

◇瑞宝単光章

勝沼 清氏(かつぬま・きよし=昭40法)
清水 英雄氏(しみず・ひでお=昭42法)
奥上 邦夫氏(おくがみ・くにお=昭40法)
前島 平九郎氏(まえじま・へいくろう=昭40法)

《専大校友を訪ねて》

カメラの奥の優しいまなざし

映画『蝉しぐれ』で撮影監督デビュー 釘宮慎治さん(昭63法)

耐え難い運命を甘受し、誇りをもって生きる下級武士と市井の人々の姿を、カメラの奥の優しいまなざしが捉えた。背景は、澄み切った田園風景。全編に繊細なカメラワークが息づいている。

今秋、公開された映画『蝉しぐれ』で撮影監督のデビューを果たした。原作は藤沢周平の代表作。原作に惚れ込んだ黒土三男監督が、15年もの歳月を費やし、満を持して映画化。その撮影監督に抜擢され、期待に応えた。

「1+1が2ではなく、3にも4にもなる。思わぬ発見や結果が出る。それが映画作りの醍醐味。今回の撮影現場でも、そんなプラスアルファがありました」

「モトリアム人間」だった学生時代。「みんなと同じことはしたくない。かといって、何かをやろうと踏み出すこともしなかった」と振り返る。

欠かさなかったのは、神田キャンパス近くの古書店巡り。同級生が就職活動で企業回りしている時期にも、本を読んでいるような学生だった。卒業を控え、進む道は「映画」しか頭になかった。

「父が『日活』に勤め、劇場の支配人をしていました。父に連れられ、映画館に行くのが子供の頃の楽しみでした」

今村昌平監督が創設した日本映画学校で、映画撮影の技術を一から学んだ。撮影助手として長い下積みがあったが、苦労話一つも出てこない。

先輩に教えられたとか、誰かの技術を盗んだ、というわけでもない。映画への姿勢は常に自然体だが、頭に引っかかりこだわっているのが「色あせない、永遠性のある映画とは何か」だ。

次回作は『対岸の彼女』(平山秀幸監督、1月15日、WOWOWで放映)。さらに、『明日の記憶』(渡辺謙主演)、『ベルナのしっぽ』(山口晃二監督)も手がけ、来年の公開を控えている。

「ファインダーを覗いて、撮影現場にいるのが無上の喜び。体中からアドレナリンが出るのが分かるんですよ」と笑った。

